

ぶどうの「べと病」に注意しましょう

(平成28年7月15日)

露地ぶどう(デラウエア)で、べと病の発生が増加しています。7月の巡回調査において、べと病が平年より多く発生しているほ場が確認されました。べと病が蔓延し、早期落葉すると樹勢が著しく低下し、翌年以降の結実にも影響します。収穫期に入っている園、近い園が多いですが、収穫終了後も定期的にぶどう園を見回り、べと病の早期発見・防除に努めてください。

1 発生状況

各調査地点のべと病の発生状況は表1のとおりである。

表1 べと病の発病葉率(調査日:7月14日)

調査地点	発病葉率(単位:%)
羽曳野市尺度	4.0%
柏原市青谷	10.0%
太子町太子	66.0%
平年値※	9.2%

※太子町太子での平年値

2 べと病の生態等

(1)病原菌は罹病した落葉内で越冬する。5~7月の雨水や水滴によって葉、幼果の気孔から侵入、感染し、数日から2週間の潜伏期間を経て発病する。

(2)発生適温は22~25℃、適度に雨がおり、気温が低めに経過すると発生が多くなる。

(3)品種により、耐病性が異なる。米国系のデラウエア、キャンベル・アーリ

一、キングデラは耐病性が比較的強く、欧州系のネオマスカット、甲斐路などは弱い。巨峰、ピオーネ、甲州、マスカット・ベリーAなどはその中間である。

3 防除対策

(1) 病害が発生しやすい時期にボルドー液を予防的に棚上散布する(果房の汚れに注意)。

(2) 発病葉及び果実は二次伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

(3) 薬剤防除を行う際は、収穫前日数に十分に注意する。

表2 ぶどうべと病の主な散布薬剤

薬剤名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
ICボルドー48Q	25～50倍	—	—
ICボルドー66D	25～100倍	—	—
エトフィンフロアブル	1,000倍	収穫7日前まで	4回以内
レーバスフロアブル	2,000～3,000倍	収穫7日前まで	3回以内



図1 発病葉(葉表)



図2 発病葉(葉裏)

【参考】

- Web 版大阪府病虫害防除指針

(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>)

- 農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム

(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)